

# 留学とハビトゥスの再構成：新しい行動や思考様式、嗜好、感じ方の身体化

窪田光男

## 1. はじめに

本稿の目的は、大学生が、在学中に1年間の留学経験を経て起こる、行動、嗜好、思考、感じ方の変化を、インタビューを通して得られた情報をもとに分析することである。分析の枠組みとしては、Bourdieuによる「ハビトゥス」の概念と、その重要性を支持しながらも批判的な見解を加え補完的な理論の構築を試みる Crossley の「身体の社会学」を主に用いる。

我々は、日常生活の中で、様々な人々と接し、その行動を観察しながら、それぞれの人の立ち振る舞いや、ちょっとした話し方、ファッションや話題などの趣味・嗜好、ライフスタイルなどに違いがあることに気づく。「お里が知れる」などのように、好ましくない人々のしぐさや言葉遣いの元凶を、出自や育ちの違いとするような表現もある。ハビトゥスは、大雑把に捉えようと、人々が生後、社会において成長とともに歴史を重ねる中で再構成を繰り返し、日常のあらゆる行動や好み、考え方や感じ方を方向付ける構造で、その人の身体に染みついており、ほとんど自覚されないものであると考えられる。ハビトゥスは、その性質上、確立されることはなく、人が生きている限り、常に再構成されている。本稿では、二十歳前後の大学生にとって、一定期間留学という形で外国で生活することは、同じ環境で生活続けるのとは顕著に異なるハビトゥスの再構成が行われるのではないかという仮定にもとづき、留学を経験した彼ら自身が、その過程をどのようにとらえているかを探る。先に述べたように、ハビトゥスは、しばしば無意識のレベルで再構成が行われるが、大学生として留学中に異文化に接する経験は、ハビトゥスの再構成をメタレベルで認識する機会でもある可能性も含め、彼らの留学経験

---

『コミュニカール』8 (2019) 21-42

©2012 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会

の語りの分析を行う。そこでまず、分析の重要な枠組みとして使用している Bourdieu の「ハビトゥス」という概念を、Bourdieu 自身の説明と、その解説や批判を行なっている文献をもとに振り返る。

## 2. 分析の概念枠組

ハビトゥスという概念について、その生みの親である Bourdieu 自身は、明確な定義を行うことが閉鎖性を生むとし、意図的に曖昧にし、科学の生成において開かれたものとしてその使用を促そうとしている（山本 2007）。そこで、本研究では、どのようにハビトゥスという概念を理解した上で、分析をおこなうかを、Bourdieu 自身の説明と、それに関する解釈をもとに整理したい。まず石井は、フランスの社会階層ごとの趣味や行動様式の差異を扱った Bourdieu の代表的な著作である「ディスタンクシオン」（1984）の解説を試みるなかで、ハビトゥスを「倫理的性向の集合である「エートス」、趣味、挙動や身のこなしなどの「身体的ヘクシス」、言葉遣いやしゃべり方を規定する「言語的ヘクシス」など、すべてを包含した上位概念としての性向体系」（石井 2010, p. 133）と説明している。つまり、ハビトゥスは、我々の思考、嗜好、行動、言動などを方向付けるものであるといえる。Bourdieu (1994) 自身は、ハビトゥスを「社会化された身体」あるいは「構造化された身体」であり「この世界の知覚とこの世界における行動を構造化する身体です」としている（2007, p. 191）。つまり、ハビトゥスは身体化された体系であり、人は、生を受けてから成長していく過程において、自分の身の回りの集団に適応していくために、自分が生きている集団内での感じ方、考え方の基本となる構造を身体化、つまり身につけていくことになり、それこそがハビトゥスと考えることができる。

Bourdieu も述べているように、ハビトゥスは、社会集団において獲得されるため、その人が属する集団の様々な特徴を反映していると考えられる。したがって、ある人の行動様式から、その人がどのような社会集団に属しているかを推し量ることもある程度可能であると言える。一方で、Bourdieu (1994) は、ハビトゥスが「自ら差別化をおこなう操作子でもある」という部分にも言及している（2007, p. 25）。ひとは、自らが自らであるために、

他者との差別化をおこなおうとする行為も、それまで生きてきた歴史のなかで構築されたハビトゥスによって方向付けられると言える。つまり、ハビトゥスは、それまでその人が生きてきた歴史により身体化された、「構造化された構造」であるだけではなく、同時にその人の歴史と共に常に変化し続ける「構造化する構造」(Bourdieu 1984 [1991], p. 466)でもある。今回のインタビューにおいても、ある学生が留学を経て「私は全然自覚がないんですけど、もしかして海外行った人ですかって聞かれる」とコメントをしているが、この学生が、留学先において、これまでとは違う社会集団の特徴を身体化したため、ハビトゥスが再構成され、その行動の中に他者が観察しうる何らかの違いが生じていることを窺わせる。したがって、ハビトゥスは、我々が生を受け社会化されていく過程において、継続的に構成され、我々はそのハビトゥスに規定されながら、考えたり、感じたり、また日常の様々な行いをしている。Crossley (2001) は、ハビトゥスを指して「行為者の過去の諸経験の能動的な残滓あるいは沈殿である」(2012, p. 177)とも述べている。ハビトゥスに方向付けられた、我々の日常の何気ない行動は、「残滓あるいは沈殿」として蓄積され、それが次なる行動を方向付けると言える。したがって、ハビトゥスは、我々が生き続けて行く限り再構成される「自己生産システム」(石井 2010, p. 143)と考えられる。

Bourdieu によるハビトゥスの概念は、社会学にはかりしれない影響を与えてきたが、同時に様々な批判にもさらされてきた。その批判の中心的なものは、人が社会にある客観的構造を身体化し、それにより行為が規定されるという決定論的な部分である。この点について Crossley (2001) は、我々が、既に構造化された社会に後から産み落とされていることから、「自らが社会的行為者になりうる前に、言語のような客観的な社会構造を内自化しなければならない」(2012, p. 208) ことは事実であり、客観的構造が主観的構造に先行しているという Bourdieu の考え方は、あながち間違っているとは言えないとして擁護している。しかしながら一方で、ハビトゥスの概念が、その獲得前の行為について説明できるかどうか曖昧である点については不備を指摘している。

この不備を補うために、Crossley の身体の社会学は、「主体」の脱中心化

を試み、Bourdieuが参照したとも言われる Merleau-Ponty の「身体図式」という概念を再検討している。主体を中心に据える考え方は、デカルトの二元論に遡り、精神が身体の上位にあり、主体（精神）が客体（身体）を操っていると捉える。一方、Merleau-Ponty (1962) は、ひとは身体であるとし、自分自身の行為について考える必要はないと考える。ひとは、身体的な仕方について、知ることなく実践感覚として知っているとともに、前反省的な感覚を持つ身体図式を獲得するとしている。この点は、Bourdieu が、ハビトゥスは「意識と言語のレベルの下で機能する」(1991, p. 466) とし、人々の行為は、ほとんど言語化されずに身体化されており、改めてそれについて考えることもない「ドクサ」と呼ばれるものに基づいていると述べていることや、行為者は「ゲーム勘を備えている」(Bourdieu 1994 [2007], p. 194) であるとか「社会的行為者は真の戦略的意図にもとづくことがほとんどない「戦略」を持っているのです」(Bourdieu 1994 [2007], p. 192) などと述べていることと通じる部分がある。山本 (2007, p. 30) も、Bourdieu の「主体とは、単独的コギトの瞬間的エゴではなく、集団的歴史の個人的奇跡 (la trace individuelle) である」という部分を引用し、ハビトゥスは、それを産み出す社会や、個人の歩んできた歴史の規制を受けながら、将来を想定して現在の行動を産出するため「意識のない認識」、「意図のない志向性」そして「世界の規制性のプラチックな使用」が原理となっているとしている。

それでは、ハビトゥス獲得前の行為は、どのように説明できるのであろうか。我々は、日常的に繰り返される行為を通して習慣を形成していく。Merleau-Ponty (1962) は、習慣の形成について、身体が新たな意味を吸収し、同化することを経て、身体がその意味を理解することであると述べている。ひとたび、我々が母語の構造を身体図式として獲得すると、言語について考えることもなくなり、その知について自覚さえなくなってしまうように、身体図式の獲得は習慣の獲得でもある。したがって、我々がこの世に生を受け、まだ自らについて自覚がない頃から繰り返される言語行為や、その他諸々の行為は、習慣として蓄積され、Bourdieu の言うハビトゥスへと構造化されていくと考えられる。そして、我々が社会生活の中で様々な行為を習慣的にこなすのは、それに先立つ行為が、そのような習慣を生じさせているから

である。また、我々の習慣的な行為は、ある時点を境に大きく変化することがあるが、これは常に再構成されながら、ときには革新的、即興的な行為を生み出す身体図式の変容ととらえることができ、やはり社会と身体の相互作用であると考えられる (Merleau-Ponty 1962)。

このように、Crossley (2001) は、「私たちの身体は、そもそも私たちの経験の対象ではなく、むしろ私たちの経験の手段そのものである」(2012, p. 40) とし、社会と身体は相互に影響を与え合っていると考える。Parsons (1964) が述べるように、ひとは社会生活の中で他者を認識しながら、それらが持つ特徴を取り入れ同化していく。そして同化の対象は、身近で特定の他者から、成長とともに、より一般化された社会的カテゴリーへと変化していく (Berger & Luckman 1991)。このような過程を経て、ひとは自分自身を、一般化された他者の視点で見ることができるようになる。Mead (1967) は、我々の中に、他者の期待を受け入れた「客我」(me) と、それに反応する「主我」(I) があり、客我は主我に認識されることにより現れ、主我の認識は社会的に形成されると述べている。つまり、自らの主観と、周りの他者の主観が、社会生活の中でせめぎ合いながら、客我に他者の特徴を取り入れる。そして、それに主我が反応することにより、我々は自らについて反省的に考えることができるようになる。Crossley の身体の社会学は、我々が自分自身の歴史を振り帰ったり、自らを観察する能力が、他者の主観を自分自身のハビトゥスの中に構造化、身体化することによってなされるという、再帰性の理論でもある。

### 3. 研究の方法

留学を通じて、自らの行動の変化を学生がどのように認識しているかについての情報を収集するため、留学を経験した学生にグループ・インタビューをするという方法を採用した。インタビューに参加したのは、英語圏で約1年間の留学を経験した大学3年生の女子5名、男子4名の計9名である。これら9名の学生は、いずれも2年次に1年間の留学が必修となっている学部にも所属しており、1年次、日本のキャンパスで共に学んだ後、1年間の留学を経て3年次で帰国し、再びもとのメンバーと共に卒業まで学修を続ける。

今回インタビューに参加した9名は、全員が、1年間の留学中の前半を、現地大学での学修に備える訓練を主に行う英語学校で過ごし、後半は、インタビュー中に学生たちが「アカデミックの授業」と呼んでいる、大学の正課授業を履修して帰国している。研究者は、これら全ての学生の留学前後の指導に関わっている。インタビューは彼らの帰国後、約半年が経った頃に行われた。

インタビューは、留学後に気付いた行動変化について自由に語ってもらうという形で開始したが、漠然とした質問で語りにくい様子が見て取れたので、ファッション面、食習慣、人付き合い、授業への取り組みなど、具体的なテーマを与えて語ってもらう方向に切り替えた。インタビューは、約90分間行われ、そのすべてをICレコーダーで録音した。

インタビュー後、録音された音声データを聞きながら、行動変化について述べている箇所を抽出し、その部分を文字化する作業を行なった。文字化は、その場での語りや、方言などの話し手の特徴も含めて、なるべく忠実に再現できるよう注意を払いながら行なったが、読みやすさにも配慮して句読点を使用した。社会言語学の分野の研究で、音声データを文字化する際、言い淀みや、話し手同士の発話の重なりなども忠実に再現することがしばしば行われるが、本研究においては、そのような会話の特徴よりも、語りの内容の方がより重要な情報なので、なるべく話し手が語る内容が伝わりやすい文字化を心がけた。また、話し手の匿名性を担保するために、特定の留学先大学名や、留学先で住んでいた町の名前など、本人が特定できる可能性が考えられる情報が含まれる箇所は、文字化しないようにした。次に、これら文字化したデータをもとに、学生の変化を、食、ファッション、友人関係、学習への取り組みに焦点を当てて分析をした結果について述べる。

#### 4. 食に対する嗜好

食に対する嗜好の変化は、Bourdieu (1994) が言う「構造化された身体」あるいは「構造化する身体」としてのハビトゥスを考える上で、有益な情報を与えてくれる。Bourdieu (1994) は、味覚などの嗜好は、幼児期に家庭で方向付けられ身体化され、一生をとおして持続するとしているが、留学に

よる環境の変化は、その構造にどんな影響をもたらすのであろうか。留学中、学生たちは、これまでに試したことのない種類の食べ物に出会う機会を得る。自ら積極的に様々な種類の食べ物を試す学生が一方、必要に迫られて消極的な態度でこれまでに食べなかったものを食べてみるという学生もいる。また、頑なにこれまでの食生活を可能な限り維持しようとする者もいる。そのような、初めて口にする食べ物との接触による、ハビトゥスの再構成の可能性を探りたい。学生たちは、留学を経て、食に対する嗜好が変化したことについて、かなりはっきりと自覚しており、ハビトゥスが再構成されたことがうかがえる。しかしながら、変化のプロセスについては、明示的に説明できる学生もいれば、まったく自覚が無く、変化が無意識のレベルで起こったと述べる学生もいる。

一人の学生はインタビューの中で、留学先で日本でこれまであまり接する機会がなかった様々な種類のエスニック料理に出会い、それらを試すうちに、どんどんと好きな食べ物が増えていった様子について以下のように語っている。

食べる種類がめっちゃ増えました。なんて言うんやろ。もともと好き嫌いとかあんまりないんですけど、食べる機会ないものってあるじゃないですか。ベトナム料理とか、フォーとか、日本であんま食べないじゃないですか。でもあっちではんまものベトナム料理とか、移民が多いからベトナム人がやっているベトナム料理屋とか、インド料理とか、いろんな種類食べて、まだこんな知らんごはんがあるんやってめっちゃ楽しくなって、帰ってきてからも、そういうちょっとエスニックなものを食べるようになりました。

上記のインタビューで、本人が「もともと好き嫌いとかあんまりないんですけど」と述べているように、この学生の場合は、それまでにすでに身体化されているハビトゥスが、積極的に新しいものを試すことを方向付けるような操作子を持っていたと考えられる。そして新しいものを試すことにより再構成されたハビトゥスは、さらに新しいものを試すことを促すというように、

常に再構成が続いていたと考えられる。この学生の場合は、新しい食べ物との出会いにより、新たな嗜好が身体化されていく過程について、メタレベルで意識的に捉えており説明をしている。

一方、嗜好の変化のプロセスに自覚のない学生は、結果としての変化は自覚しているものの、どのようにしてそのような変化が起こったかについては説明することができない。次に示す学生は、食に対する嗜好の変化について問われると、まずは何も変化がなかったと言い切った直後、ある一つの変化を思いつき、以下のように語っている。

なんも変わってない。そや、一個だけ嫌やなと思ったのが、めちゃ個人的な話なんですけど、母親が炭水化物に炭水化物を出すんですよ。それはやめてくれっていうのを留学前は言わなかったんですけど、留学から帰ってからそれはほんまやめてって、焼うどんにご飯みたいななんとかすごい嫌で。

この学生は、それまで育ってきた過程で、炭水化物中心の食事に違和感を覚えることがなかったようであるが、その嗜好は、留学を契機に変化したようである。留学後になぜ炭水化物中心の食事に違和感を持つようになったかについては認識していないが、留学中に何を食べていたのかを聞くと「ひたすらチキンばかり食べてました」と答えている。留学中のタンパク質中心の食習慣により新たな身体図式が獲得され、嗜好に変化が生じた可能性が考えられる。

また、留学中は、ホームステイを経験する学生が多いので、ホームステイ家族に対する礼儀から、好みでない食材を無理をして食べることで、嗜好が変化していったと語る学生もいる。以下の学生は、ホームステイ家族に対する遠慮から、日本で食べたことのない野菜も残さずに食べることで、だんだん野菜の美味しさに気づき、帰国後は自分から進んで野菜を摂るようになったと述べている。

食べれるようになった野菜がめちゃくちゃ増えました。結構、野菜嫌い



だったんですよ。食べれる野菜が限られてて。たとえば家とかで色々な種類の野菜を出されても、親だしとったりして、結構食べないで残したりしてたんですよ。留学でホームステイだったんで、さすがに残すのはちょっと申し訳ないじゃないですか。で、食べてたら意外と食べれるんだな。野菜の種類なんかも、日本では見たことがないピーツとかコリアンダーとか、絶対食べようとか思わなかったのに、出されて食べてみて意外とイケると思って。それから日本に帰ってきてからも食べたりとか。今一人暮らしなんで、自炊とかするんですけど、野菜の種類なんかも、今まで買わなかったものも買うようになったり。

この学生のように、留学を通して「食わず嫌いが減った」と答えるものは多い。好むと好まざるに関わらず、食べないといけないような状況を日常的に経験することにより、新たな身体図式が獲得され、ハビトゥスの再構成が起こっていると考えられる。しかし、一方で「あっちのホームステイの朝はだいたい食パンとシリアルだったんで、こっちに帰って来てからはもう食いたくない。もう嫌だ」など、帰国後は留学中に食べていたものを避けるようになったという学生もいる。このような変化も、ハビトゥスの再構成の一つの形態と考えられる。

## 5. ファッションの嗜好

留学中の行動の顕著な変化として、多くの学生が自覚しているのが、どのような服装をするかや、髪型、化粧など、ファッションに関するものである。多くの学生は、留学中は日本にいる時とはまったく違ったファッションで生活していたと述べている。これは、留学中に彼らが置かれた学生社会で、周りの学生たちを観察しながら起こった変化だとしている。彼らの留学先はアメリカ、カナダなどの北半球やオーストラリア、ニュージーランドの南半球の国々と広範囲に渡るが、彼らの現地でのファッションに対する観察は、驚くほど一致しており、これらの国々の学生たちは、ファッションには概ね無頓着だとしている。その代表的なコメントは、以下のようなものである。

めちゃ楽な服を着る。学校に授業を受けるためだけに行ってるみたいな。機能性だけなんです。着やすいとか。

普通にスエットでも全然出れるし。お化粧もしんでも出れるし。

外国の方が周りを全然気にしていない感がある。別に、それで判断されへんっていうか。

留学を終えた学生たちの話を聞いていると、彼らは、上記のような観察にもとづき、現地の学生たちに同化するようなファッションで生活していたようである。逆に、日本にいた時のようなファッションは、留学先の生活にはそぐわないと述べる学生もいる。

逆に日本から持って言った、例えばロングスカートとか。そういうのをはいていくとめっちゃ浮いてる感じがするんですよ。そこまでお洒落っていうか、服にバリエーション出してる人いないなあって。

留学中に身近な他者のファッションを観察しながら「服にバリエーション」を持たせることが、不適切のように感じ、意識的に自分のファッションも、「浮いている感じ」がしない、特定の選択肢の中に収まるようにしていった様子が見える。このような留学中の日常的なファッションの変化は、その後の彼らのファッションに対する嗜好にどのような変化を与えたのかも興味深いところであるが、彼らの主張によると、日本に帰国すると、やはり周りに同化するために、もとにもどらざるを得ないということである。

日本の方がちゃんとせなみたい。お化粧もちゃんと毎日して、家から出るってなったら服もちゃんと着てみたい。みんな、めちゃちゃんとしてるから。

この学生のコメントからは、留学後は、周りに合わせる努力をしている様子

がうかがえるが、「ちゃんとせな」という表現に表れるように、「お化粧品もちゃんとして」「服もちゃんと着て」という行為は、必ずしも自らの嗜好と一致したものではなく、どこか義務感から発生した行為であることがわかる。その点で、留学を通してファッション感覚において、なんらかのハビトゥスの再構成が起り、帰国後の社会に適応するために、日常的に意図的、反省的な態度でファッションを調節しながら、さらなるハビトゥスの再構成が起っていると考えることができる。

これまでに紹介した学生たちは、留学中はファッションには気を払わなくて済んだと述べ、多くの学生、特に女子学生はグループインタビュー中、同じ意見で一致していた。一方、留学を契機にファッションに気を配るようになったと述べる学生もいる。以下に紹介する男子学生は、これまでファッションにはまったく興味がなかったが、留学をとおしてファッションに気を払うようになり、その結果、当たり障りのないファッションを心がけるようになったとし、以下のように述べている。

自分の場合は逆でしたね。留学前は服にはまったく興味が無くて、服を自分で買いに行ったことがないんですよ。けど留学中になって、なんかこの服ないなみないな。わからへんですけど。なんか改めて確認した時に、この服ちょっとないわみたいになって。ようやく留学中になって自分が何を着たいのかを確認できたわけ。なんか、ほぼ何も描いてない服を着たいですね。当たり障りのない服。この服を見てダサいって判断のしようのない服。そういうの面倒くさい。この服はださくみえるかなって気にする時間が面倒くさいなってなった。それだったら何も思われない服を着て歩いている方が楽。

この学生のファッションに対する反応は、留学中にファッションに気を使わなくなったとする学生の反応と一見すると反対のように見える。しかしながら、この学生も、留学中に周りのファッションを観察しながら、それらに同化しようとして「当たり障りのない服」に行き着いたということで、前述の学生たちと、留学先の服装文化に同化しようとする動機は同じである。実は、

前述の学生は、留学の初期段階においては、現地学生たちとの関わりの中で「気にしていない」服装をしようと気を使っている。また、後述の学生は、服装に対する周りの評価に気を使わなくてもいいように、気を使ってお洒落か否かを「判断しようのない」服装選びをしているのである。今回のインタビューから得られたデータだけをもとにして結論づけることはできないが、ファッションに関するハビトゥスの再構成は、それまでに構成されている構造がもたれていると考えられるが、留学による異文化体験が、その構造化された構造の再構成に大きな影響を与えている可能性は大きいと考えられる。

## 6. 友人関係

留学を経て、学生が変わったと感じているものに、友達付き合いの仕方がある。1年次、共に学んだ仲間が、1年間の留学後に再会すると、人が変わったように感じ、付き合い方に難しさを感じている学生もいる。学生の一人は、上手く説明できないものの、その変化を以下のように語っている。

みんな留学で変わってきたから、人が変わって帰ってきてるから。自分も変わったけど、なんか難しなって思いました。なんか、あっ違うみたいなの。前はこんなじゃなかったなみたいなのが見えるじゃないですか。

それまで、慣れ親しんだ日本の大学社会における友人関係から1年にわたり距離をおき、それぞれの留学先で、新たな社会の人間関係に巻き込まれる中で、学生たちは、これまでとは異なる友人関係の作り方を身につけてきたと感じている。多くの学生は、周りの学生になんらかの変化が起こっていると気づいているが、それが何なのかを説明することはできない。つまり、変化は直感的な部分で感じ取られており、言語化はされていないようである。あるいは、その変化について言語化することに、何がしかの罪悪感を感じている可能性もある。一方、自分自身の変化については、明示的に語る学生もいる。以下の学生は、留学後は周りの学生に合わせようとしなくなった自分の

変化に気づき、以下のように述べている。

自分は人にまったく興味がなくなりましたね。もうめっちゃ変わりました。ほんまに興味ないですね。1回の際はこいつ何考えてんねやるとか、こいつにこういうふうに合わせて方がとか、結構人間関係気にしながら生きとったんですよ。留学から帰ってきて、こいつちょっと嫌やなと思ったら、じゃあバイバイみたいな。

この学生のように、留学後は自分の周りの人間関係について、あまり気にならなくなったと述べる学生は多い。上記の学生の発言に続き、次々に同意する意見を述べる学生が現れた。以下は、その一例である。

それはあると思う。嫌いな人とは合わさなくていいと思うようになった。

なんか一人で行動することにあまり抵抗がなくなった。常に誰かと群れてないと、なんか周りからこの人、友達いないとか色々思われるのかなとか、意識してたけど、あまり周りからどう見られてるのか、あんまり気にしなくなりましたね。

彼らの話を総合すると日本の学生社会の中では、周りの目を気にしたり、周りに同調しながら生活をしてきたが、留学中の学生社会では、それらから解放され、自分自身がより快適と思える人との関係づくりをするようになったということである。そして帰国後、もとの仲間との人間関係の中に巻き込まれても、同じ学部の中では、みんながそれぞれに類似の経験を経て変わって帰ってきているので、留学中の延長線上で友達付き合いをしているとのことである。この人間関係の作り方の変化は、ハビトゥス、そして身体と社会の相互作用を考える上で、興味深いコメントであると言える。意識的、無意識的に関わらず、学生たちは、これまでに歩んできた歴史の中で、友人とどのように付き合うかを知り、その方法をハビトゥスとして身体化してきている。そして留学をすることで、これまでとは異なる社会の中で、学生たちは、人

付き合いにおいて新しい経験を繰り返し、それによりハビトゥスの再構成が行われている。仮に、学生たちが、帰国後、留学を経験していないグループの人間関係に巻き込まれることになると、その社会との相互作用でハビトゥスはまた違った形で再構成される可能性が考えられるが、他の仲間も留学経験者の場合は、それぞれの留学先で再構成されたハビトゥスがせめぎ合いながら、さらなる再構成が行われると考えられる。

そのような中で、以下に紹介する学生のように、自分自身は、留学前後において、特に人間関係の作り方において変化はないと主張する学生もいる。

僕はもともとそんな、あまり周りを気にしてないタイプなんで、周りが変わったかどうかはあまりわからない。自ら自分と合わない人と関係を持つとうとかなかったし、変わってないですね。

この学生のように、留学前からハビトゥスが、あまり周りにとらわれない操作子を持って構造化されていると、留学を経ても顕著な違いに気づきにくい可能性が考えられる。また、異なる社会の人間関係に巻き込まれることにより、自分が変わってしまうことに否定的な見方をする学生は、自分とその友人に関しては、変化はなかったと以下のように答えている。

私はなんも変わってないです。一緒にいる人たちがもともと自分の芯がしっかりしていたんで。今も全然変わってなくて、再会しても私は今までどおりだなんて感じ。

自分の周りの友人が、留学を経ても友達づきあいの仕方に変化がないという特徴について、否定的に捉えるのではなく、「もともと自分の芯がしっかりしていた」というように肯定的に表現していることからわかるように、この学生は、状況に合わせて、人付き合いの方法を変えることは、自分自身をしっかりと持っていないというような否定的な見解を持っていると考えられる。しかしながら、この学生は、上記の発言の後、続けて以下のようなコメントをしている。

留学とハビトゥスの再構成：新しい行動や思考様式、嗜好、感じ方の身体化

今ここで言っていることと、実際に自分がやっている人間関係とは、若干ずれがあるのかなって思う。自分ではこうも思っている、実際に自分の行動を分析したら違ってるかもしれないじゃないですか。

このように、この学生が「変わっていない」と思おうとする一方、自分の中に何か変化を感じ取っている可能性も否定できない。この点については、さらなるデータの収集と分析が必要である。

## 7. 学習への取組

留学中の日々の学習への取り組みについて質問すると、多くの学生が、声をそろえて留学中は日本にいる時よりも、より計画的に勉学をこなしていたと述べている。以下に紹介する学生は、自分自身について計画性がないと述べているが、留学中は「ちゃんと」やっていたようである。

私すごい計画性ないんですよ。スケジュールを立てるのなんかは嫌いで、やりたい時にやりたいことをやるのが楽しいですよ。でもそんな私でも、ちゃんとやるっていうのが一応できるようにはなりました。今はもう戻ったんですけど。

留学前に比べ、留学中は計画的に学習を進めるようになったのには、様々な状況の変化によるものであるが、その一つは課題のタイプが日本とは異なるというものである。いずれの学生も、留学中には長いエッセイの課題が中心だったと答えている。以下の学生のコメントは、長いエッセイ課題をこなそうとすると、自ずと計画的にならざるを得ないとしている。

留学中、課題はずっとエッセイ、エッセイだったんで、長いエッセイが基本的にすべてみたいなき感じだった。結局、長いエッセイをどういうスケジュールで、どう終わらせるかが一番鍵みたいな感じだったんで。

課題の質に加え、言語的なハンデが理由で計画的にならざるを得なかったと

答える学生もいる。以下の学生は、ハンデを乗り越えて、いいエッセイを書こうとすると、より時間がかかることが、計画的な取り組みにつながっていると述べている。

留学中って、ほかのネイティブとくらべて英語のハンデがあるわけじゃないですか。英語っていう。それでエッセイを書かないとってなると、かかる時間が違ってくる。いいものをだそうと思ったら、そのハンデを越えて時間、やる気、モチベーション。自分が他より下からスタートしているって意識があるから、その分ちゃんとしようと。

また、言語的なハンデのため、提出前にネイティブスピーカーの友人にチェックをお願いしないといけないことが、計画性の理由であるとする学生もいる。

友達とかにネイティブチェックを頼んだりすると、その人の課題の都合もあるので、やっぱり期限内に終わらせないと、相手に迷惑がかかってしまったら困るので。

これら、留学中は計画的に勉強に取り組んでいる学生が、先に紹介したように「今はもう戻ったんですけど」とコメントしているように、帰国後は、留学前の状態に戻ってしまうこともある。今回のインタビューでは、全員が留学前の状態に戻ったという回答に頷き、留学中の姿勢を持続しているという学生はいなかった。学習に取り組む姿勢などは、長い期間の習慣の中で、ハビトゥスとして構造化されるものであると考えられるが、同時に、課題の質や、課題に取り組む自分自身の置かれる立場や、言語状況などが、その再構成に大きく影響を与えている可能性が考えられる。あるいは、1年間という留学期間が、学習への取組に長期的な変化をもたらすようなハビトゥスの再構成には十分ではなかった可能性も考えられるが、今回の研究で収集したデータから結論づけることはできない。

先に、英語にハンデがあると述べていることが、計画的な学習の取り組みにつながったというコメントがあったが、自分自身の英語力が他の学生に比べて



劣っていると感じることは、授業中に周りに助けを求めたり、積極的に働きかける行動につながったというコメントも多い。

アカデミックの授業とかで、だいたい日本人一人とかだったんで、例えば課題がこの日までにこういうのを作ってねとか言われた時に、ほんとに自分が思ってるのと、言われたのが正しいのか、合ってるのかわからないんで、授業終わりとかに個人的にチェックとかするようにしてみましたね。

まわりに助けを求めるようになった。留学してる時は、日本ではそこまであんまり人に聞いたりとかはしてなかった気がする。留学中は、先生に個人的に聞いたり、現地の友達になった人とかにチェックしてくれないって頼んだりとか。大きい授業で自分一人で受けてる時とかは、全然知らなくても隣にいる人とかに、宿題なんって言ったかも一回教えてくれるとか。そういうのを聞くのに抵抗なかったし、聞かなきゃっていう感じだった。

これら学生のコメントを受け、インタビュー中に、「日本でもチェックした方がいい状況はたくさんあるんじゃない」と問うと、「日本ではあんまり聞くとは思わない」と述べ、以下のように続けている。

日本だったら日本語じゃないですか。聞けるのが普通だって周りから思われるし。それは自分のミスでしょ、みたいな感じになりかねない。英語だったら、留学生ですみたいな感じ出しておけば、しょうがないなってなる。

上記の発言からわかるのは、留学生としての英語のハンデは、周りに助けを求めることを正当化する口実となっていたようである。現地の社会に、英語のハンデを背負った留学生として参加することにより、周りのクラスメートと積極的に関わりながら、助けてもらうという行為を日常的に繰り返し、そ

れによりハビトゥスの再構成が行われていったようである。さらに、留学先での授業が、個人的な作業だけでなく、グループディスカッションやペアワーク等を多く含むものが多いことも、学生の行動変化に影響を与え、ひいてはハビトゥス再構成に繋がっていると考えられる。

留学してから、アカデミックの授業とかは、誰かと仲良くなっていないとグループディスカッションとかに参加できなくなっちゃうんで。3回生になってからも臨機応変にできるようになった。1回生の時はどうでもいいと思ってた。

この学生は、留学前は同じ授業を履修している学生たちと、普段からいい関係を築いておくなどということは「どうでもいい」と考えていたようであるが、留学中の授業はグループワークが多く、スムーズに参加するために、他の履修者との関係作りに気を配るようになったということである。そして、それは帰国後の授業でも、「臨機応変に」グループワークに参加することに活かされていると述べている。

さらに、授業中の行動に関しても、留学前に比べ、留学中はかなり積極的に発言し、授業に参加していたと振り返る学生が多い。これは、あるひとりの学生が「しゃべっている人がいたらそれに反応するけど、しゃべらない人ばかりだとそれに流される」と述べている言葉に代表されるように、積極的な発言をする学生が多数を占める新しい環境へ巻き込まれたことにより、そこで出会った他者の特徴を取り入れた結果起こったと考えられるものと、それら他者との関わりの中で、授業で発表する価値のある事柄の基準についての再構成が起こったことが考えられるものがある。一人の学生は、留学中の英語学校の授業への参加について、以下のように述べている。

語学学校の時に感じたのが、ほかの色々な国から来てる人たちたくさんいて、結構どうでもいい意見とか、なんでそんな質問するんだろみたいなことを、割とみんなパンパンって言うんですよ。しかも、文法とかもぐっちゃぐっちゃだけでも。みんな思ったことを言っちゃうから。ああ

別にいいんだって思って。で、先生もそれに対して鬱陶しそうな顔もしないから。もういいんだと思って。文法が間違っていようが、第二言語なんだからしょうがないし。なんか気にせず、しゃべりやすかったかな。

この学生のコメントから、以前の「どうでもいい意見」や「文法がぐっちゃぐっちゃ」な発言は、教室でするに値しないという価値観は、それらを気にせず行うクラスメートや、それを受け入れる教師との交わりを通して、発言すべきことに関する基準が再構成されている様子が見える。このような、英語学校時代に再構成された授業参加への姿勢は、英語学校を卒業し現地大学の正課授業を履修始めた後も継続されるようである。

アカデミックでも、自分日本人ひとりで。手あげて発言する時とかでも、大してすごい意見じゃなくても、まあ日本人だし、別にハンデあるし、別にすごいこと言わなくても、自分の意見言っちゃえみたいなのところはありました。

現地大学の正課授業を受けながら、留学生である彼らは、英語のハンデを背負ったマイノリティーであるという自覚を持つ。そして、授業への参加を継続する中で、言語的ハンデを持つ少数派としてのハビトゥスの再構成が行われる。先述の学生のように、ハンデを逆手に取り、未熟な発言もある程度は許容されるという期待が生まれ、それが積極的な発言を促していると考えている学生は多い。また、留学生、あるいは日本人という背景を強みにして、現地学生ができない発言ができることが積極的な参加につながる理由とする学生もいる。

ディスカッションとかやったら、日本では当たり前なことが、あっちでは違うかったりするじゃないですか。だから逆にネタが多いっていうか、なんのことも日本ではこうですって、ディスカッションに貢献できるじゃないですか。宗教の話とかしてた時も、日本ではどうなんって聞かれたりして話せるから。日本やったらクリエイティブなアイデアじゃ

ないといけない。

Bourdieu (1994) は、ハビトゥスを「自ら差別化をおこなう操作子」(2007, p. 25) と述べている。留学中、彼らは自分自身を留学生であることや、現地の様々な学生たちとの違いについて認識する。それは、ハビトゥスの規制を受けて行われていると同時に、他者との交わりの中で、自らの差別化をおこなうハビトゥスは再構成され続ける。上記の発言をした学生が、続けて「逆に日本に帰ってくるとあっちのネタが使える」と述べているように、帰国後は、ある特定の場所で留学していたという背景を活かし、他者との差別化をおこなうハビトゥスはさらに再構成されていると考えられる。

## 8. まとめ

大学時代の1年間の留学は、学生たちの行動に様々な変化をもたらす。留学までに、それぞれの中で構造化されていた彼らのハビトゥスは、留学中も絶え間なく再構成され続け、それが、食習慣、ファッションの趣味、友人関係の作り方、授業への取り組みの仕方などの変化として現れている。帰国後、自省的に振り返り、自分自身の変化について明示的に語るができる変化もあれば、無意識のレベルで起こる変化もある。また、帰国後、留学前の環境に戻り、さらにハビトゥスが再構成されることにより、留学中の変化が留学前の状態に戻ろうとするものがあれば、変化がさらに継続するものもある。この変化が定着するものと、一過性のものとの違いは、ハビトゥスの再構成とどのような関係があるのかについては興味深い所ではあるが、これについて議論するには、今後さらなるデータ収集が必要である。

今回の分析は、留学を経験した当事者である学生のインタビューデータのみを使用して行なった。今後は、参与観察による、行動変化の詳細な記述やインタビューデータ等を総合的に分析する規模の大きいエスノグラフィーの手法を取り入れた研究を行うことで、学生たちの中で、反省的な自己の振り返りをおして起こる変化や、無意識のレベルで起こる変化と、ハビトゥス再構成の関係について、さらなる知見を得ることが期待できる。今回の研究が、そのような大規模な研究の足がかりとなれば幸いである。

## 参考文献

- Berger, P. L. & Luckman, T. (1991). *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. London: Penguin Books Ltd.
- Bourdieu, P. (1984). *Distinction*. London: RKP. (ブルデュー, P. 『ディスタンクシオン (I, II)』石井洋二郎訳, 藤原書店, 1991年)
- Bourdieu, P. (1994). *Raisons Pratiques: Sur la theorie de l'action*. Paris: Editions du Seuil. (ブルデュー, P. 『実践理性 行動の理論について』加藤晴久他訳, 藤原書店, 2007年)
- Clossley, N. (2001). *The Social Body: Habit, Identity and Desire*. London: Sage Publications. (クロスリー, N. 『社会的身体—ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』西原和久他訳, 新泉社, 2012年)
- Mead, G. H. (1967). *Mind, Self and Society*. Chicago: Chicago University Press.
- Merleau-Ponty, M. (1962). *The Phenomenology of Perception*. London: RKP.
- Parsons, T. (1964). *Social Structure and Personality*. New York: The Free Press.
- 石井洋二郎 (2010). 『差異と欲望—ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む』, 藤原書店
- 山本哲士 (2007). 『[増補版] ピエール・ブルデューの世界』, 三交社

## Study Abroad and the Restructuring of Habitus: Embodying new habits and desires

Mitsuo KUBOTA

**Keywords:** Habitus, embodiment, study abroad

This study attempted to explore changes in behaviors, tastes, ways of thinking, perceptions and so on among university students resulting from one year of study abroad. In order to uncover the students' perceptions of their changes through study abroad, a group interview was conducted. The interview data were transcribed and used for analyses employing Bourdieu's conceptual framework "Habitus" together with Crossley's embodied approach to sociology.

The analyses demonstrated how these students noticed and interpreted changes in their eating habits, tastes for fashion, how they socialized with friends, and how they participated in class. Based on the narrative data, some changes occurred consciously with their reflexive activities while others occurred at the unconscious level. In addition, there were changes for which the students were not consciously aware of the process but were aware of the outcome. Nevertheless, the students' structured Habitus appears to have been constantly restructured throughout the study abroad.

The present study is preliminary and only employed the students' narratives elicited through the interview. In order to understand the impact of study abroad on their changes, a large scale ethnographic study that includes participant observations together with the students' narratives is needed.